

死に関する言葉集 — ほぼ生年順

▼ 孔子 思想家 (BC552 - BC479) 享年 74

- 未だ生を知らず、焉^{いづく}んぞ死を知らん
- 朝^{あした}に道を聞かば、夕べに死すとも可^かなり



▼ バックユリデース ギリシアの抒情詩人 (BC520 頃 - 450) 享年?

- 人間にとって、およそ死にまつわるものの中で一番苦しいものは、死ぬ前に味わう死の恐怖による幻想である。

▼ 紫式部 平安時代中期の女性作家、歌人 生没年不詳 享年

- ありと見て 手にはとられず 見ればまた ゆくへもしらず 消えしかげろふ

《大意》 目の前を飛び回っているけれども、手に取って見ることはできなかった。次に見た時には、もう行方も知れずに消え失せてしまっていた儂い蜻蛉の命であることよ。



▼ 道元 曹洞宗 (日本) の開祖 (1200 - 1253) 享年 53

- 生死はすなわち仏の御いのちなり
- 生を明らめ死を明らむるは、仏^{ぶつ}家一大事の因縁なり。生^{しょう}死^じの中に仏あれば生死なし。ただ生死即ち涅槃と心得て、生死として厭^{いと}うべきもなく、涅槃として欣^{ねご}うべきもなし。この時はじめて生死を離^{ぶん}るる分あり。



《注》 因縁： 物事の根源、究極の目的

▼ **日蓮** 日蓮宗（法華宗）の宗祖（1222 - 1282） 享年 60

○ 日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく人の寿命は無常なり、出る気は入る気を待つ事なし。風の前の露尚譬えにあらず、かしこきはかなきも老いたるも若きも定め無き習いなり、されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべしと思ひて、一代聖教の論師・人師の書釈あらあらかんがへあつめて此を明鏡として、……



《大意》 日蓮は幼少のときから仏法を学んできましたが、念願したことは「人の寿命は無常である。出る息は入る息を待つことがない。風の前の露というのは単なる譬えではない。賢い者も愚かな者も、老いた者も若い者も、いったいどうなるかわからないのが世の常である。それゆえ、まず臨終のことを習って、後に他ことを習おう」と思ひて、釈尊一代の聖教や論師や人師の書や釈をあらあらかん考え集め、これを明鏡として……

▼ **一休宗純** 禅僧（1394 - 1481） 享年 88

○ 門松は 冥土の旅の 一里塚 めでたくもあり めでたくもなし

《注》 「門松は めいどのたびの 一里づか 馬かごもなく とまり屋もなし」という歌が、後世に変容して流布した可能性が高いとのこと。



▼ **蓮如** 本願寺第 8 世（1415 - 1499） 享年 85

○ **白骨の文**

それ、人間の浮生^{ふししょう} [内容の無い人生]なる相をつらつら観ずるに、おおよそ儚きものは、この世の始中終^{しちゅうじゅう} [若年期・壮年期・老年期のこと]、まぼろしのごとくなる一期^{いちご} [人の一生]なり。されば[それゆえ]、いまだ萬歳^{まんざい}の人身^{にんじん} [寿命]をうけたりという事を聞かず。一生すぎやすし。今に至りて誰か百年の形体^{ぎょうたい} [肉体]を保つべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、遅れ先立つ人は、元のしづく、



末の露つゆより繁し[数量が多い]と言えり。されば、朝あしたには紅顔こうがんありて夕ゆうべには白骨となれる身なり。すでに[もはや]無常の風きたりぬれば、即ち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李とうりの装いを失いぬるときは、六親眷属ろくしんけんぞくあつまりて嘆き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙よわ[茶毘の煙]となし果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれといふも、なかなか疎おろかなり[十分ではない、不十分である]。されば、人間の働き事は、老少不定ろうしやうふじやうのさかいなれば[年齢に関わりなくやってくるものであるから]、誰の人も早く後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深く頼み参らせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ[恐れ多いことです]。

▼ 豊臣 秀吉 (1537 - 1598) 関白、太閤 享年 62 歳

- 露と落ち 露と消えにし我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢



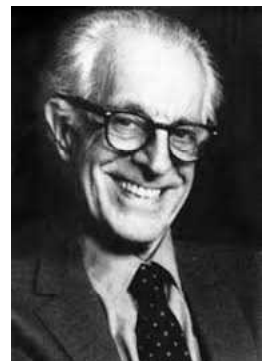
▼ 小林 一茶 (1763 - 1828) 俳人 享年 65 歳

- いざさらば死にげいこせん花の雨
死に支度いたせいたせと桜かな
またことし死に損じけり秋の暮
美しや障子の穴の天の川



▼ エリス イギリスの心理学者・性科学者 (1859 - 1939)
享年 80

- 苦悩と死は人生の一部である。従って、苦悩と死を拒否するというこ
とは、すなわち人生そのものを拒絶するということに繋がるのである。



▼ **夏目 漱石** 作家 (1867 - 1916) 享年 49 病死

○ 死んだら皆に棺の前で万歳を唱へてもらひたいと本当に思つてゐる。私は意識が生のすべてであると考えるが同じ意識が私の全部とは思はない。死んでも自分はある、しかも本来の自分には死んで初めて還れるのだと考へてゐる。



▼ **谷川 俊太郎** 詩人 (1931 -)

○ 絵本「かないくん」より 絵は漫画家の松本大洋

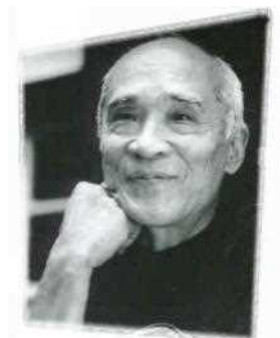
《注》 病で死期の近いおじいちゃんは絵本作家。あるとき突然60年前の小学4年のとき、病気で死んだ同級生「金井君」を思い出して、絵本を描いている。孫の「私」は小学生くらいの女の子。

おじいちゃんは、
もう来年の桜は見られないと
自分で知っている。

「死を重々しく考えたくない、
かと言って軽々しく考えたくもない」
独り言のようにおじいちゃんが言う。

「この絵本をどう終えればいいのか分からない」

「そんなに長い間生きてきても、
まだ分からないこと、
知らないことがあるなんて素敵」
と私が言ったら、おじいちゃんが
「ほんとだ」と言って笑った。

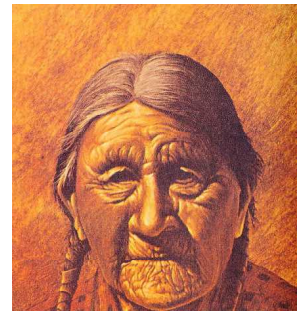


▼ **ナンシー・ウッド** プエブロインディアンから影響を受けたアメリカの詩人。(1936 -) (訳) 金関寿夫

《中沢新一から一言》 宇宙の流れの中で、自分の位置を知っている者は、死を少し

も恐れない。堂々とした人生、そして祝祭のような死。ネイティブアメリカンの哲学は、我々を未来で待ち受ける。

今日は死ぬのにもってこいの日だ。
生きているすべてが、わたしと呼吸を合わせている。
すべての声が、わたしの中で合唱している。
すべての美が、わたしの目の中で休もうとしてやってきた。
今日は死ぬのにもってこいの日だ。
わたしの土地は、わたしを静かに取り巻いている。
わたしの畑は、もう耕されることはない。
わたしの家は、笑いに満ちている。
子どもたちは、うちに帰ってきた。
そう、今日は死ぬのにもってこいの日だ。



▼ スティーブ・ジョブズ アップル社の共同設立者の一人 (1955 - 2011)

○ スタンフォード大学卒業式における伝説のスピーチより

私は 17 の時、こんなような言葉をどこかで読みました。確かこうです。「来る日も来る日もこれが人生最後の日と生きておしよ。そうすればいずれ必ず、間違いなくその通りになる日がくるだろう」。それは私にとって強烈な印象を与える言葉でした。そしてそれから現在に至るまで 33 年間、私は毎朝鏡を見て自分にこう問い掛けるのを日課としてきました。「もし今日が自分の人生最後の日だとしたら、今日やる予定のことを私は本当にやりたいたろうか?」。それに対する答えが“NO”の日が幾日も続くと、そろそろ何かを変える必要があるなど、そう悟るわけです。



自分が死と隣り合わせにあることを忘れずに思うこと。これは私がこれまで人生を左右する重大な選択を迫られた時には常に、決断を下す最も大きな手掛かりとなってくれました。何故なら、ありとあらゆる物事はほとんど全て……外部からの期待の全て、己のプライドの全て、屈辱や挫折に対する恐怖の全て……こういったものは我々が死んだ瞬間に全て、きれいサッパリ消え去っていく以外ないものだからです。そして後に残されるのは本当に大事なことだけ。自分もいつかは死ぬ。そのことを思い起こせば自分が何か失ってしまうんじゃないかという思考の落とし穴は回避できるし、これは私の知る限り最善の防御策です。

君たちはもう素っ裸なんです。自分の心の赴くまま生きてならない理由など、何一つない。

▼ **細川宏** 元東大医学部教授（1922 - 1967） 癌のため 44 歳の若さで死去。

しなう心

詩集『病者・花』より

苦痛の激しい時こそ
しなやかな心を失うまい
やわらかにしなう心である
ふりつむ雪の重さを静かに受けとり
柔らかく身を撓めつつ
春を待つ細い竹のしなやかさを思い浮かべて
じっと苦しみに耐えてみよう